ふるさと周南ウォッチング

第6回

ニッコウキスゲが咲く
宮下川を歩く

主催・資料作成：ふるさと運動実行委員会・周南公民館
協力：宮下自治会・宮下緑地をきれいにする会

・掲載している施設は管理されている方にお断りして見学をお願いします。

・本資料は平成 27 年 6 月 20 日時点での情報を掲載しています。

ふるさと周南ウォッチングとは？

周南公民館開館以来、周南地区と周南公民館で取り組まれてきた「ふるさと運動」。その中では地区（自治会）ごとの歴史や文化を綴った「ふるさと誌」や、「ふるさと地域手づくりマップ」「散歩マップ」「すなみ巨樹･古木･名木マップ」など、さまざまな記録や貴重な資料が地域のみなさんの手でつくられてきました。

平成 24 年度に「開館 40 周年記念事業」として、これらをもとに周南地区内を実際に歩いて訪ねようと企画されたものが『ふるさと周南ウォッチング』です。企画当初から、継続して 50 周年につながる取り組みを！との声もあり、また、参加されたみなさまからも期待の声が多かったことから、毎年１回実施されることとなりました。

これまでの「ふるさと周南ウォッチング」は…

H24.09.29　第１回
　馬登伝統の神事「獅子神楽舞」・巨樹古木・上総掘りの井戸・オーム岩

H24.11.17　第２回
　タイムスリップ～江戸・鎌倉・古墳～地域の歴史を訪ねて（浜子・小山野）

H25.02.02　第３回
　地域の巨樹古木を訪ねて（常代・六手）周南小学校・六手八幡神社・附属寺　他

H25.12.07　（関連実施）
　第５回「共に学ぶ市民の集い」（浜子･小山野）

H26.04.12　第４回
　春の日差しを浴びながら…馬登のシダレザクラを訪ねる（皿引･尾車･草牛･馬登）

H26.12.14　第５回
　六手の遺跡群を訪ねる（小学校裏～六手方面）鹿島台遺跡・狐山古墳　他

H27.06.20　第６回
　ニッコウキスゲが咲く宮下川を歩く(大山野･宮下･常代)宇賀神･遍照寺と春日神社

H28.12.11　第７回
　鎌倉道を巡る～岩富寺・小山野城（二城）跡～

H30.01.28　第８回
　草牛・鹿野山を歩く～草牛八幡神社・車地蔵（六手野）・鹿野山への古道～

H30.06.17　第９回
　初夏の周南路　八十八カ所巡り［附属寺（六手)］と宮下川のニッコウキスゲ

R1.09.29　第１０回（台風により中止）
　周南の絶景と馬登の獅子神楽を訪ねて

今日のコース

（ふるさと地域てづくりマップ（宮下編）より

小学校わきから
六手へ続く道

周南小には渡邉衡平氏の
記念碑があります

大きないちょうの木がある
宮下保育園

みんなすぐ近くに
あります

↑消防機庫　↑郵便局

宮下自治会館

六地蔵

宮下地区の年中行事

1月 1日　四方拝
（春日神社にて早朝にお参りする）

1月 下旬　野焼き

2月 3日　どんど焼き

4月 3日　八雲神社祭礼

10月 初旬　春日神社祭礼

※この他に早苗ぶり・風祭り・虫送り・
秋葉講などの行事があります。

遍照寺　昔は寺小屋が
ありました。

市指定保存樹木
イロハカエデは
遍照寺の入口に
あります

お正月の四方拝

古い歴史を持つ春日神社

②水の神様　宇賀神

水の神様 宇賀神

上総堀の井戸からは
きれいな水が

山車もでる春日神社祭礼

八雲神社のお祭り

冬の名物どんど焼き

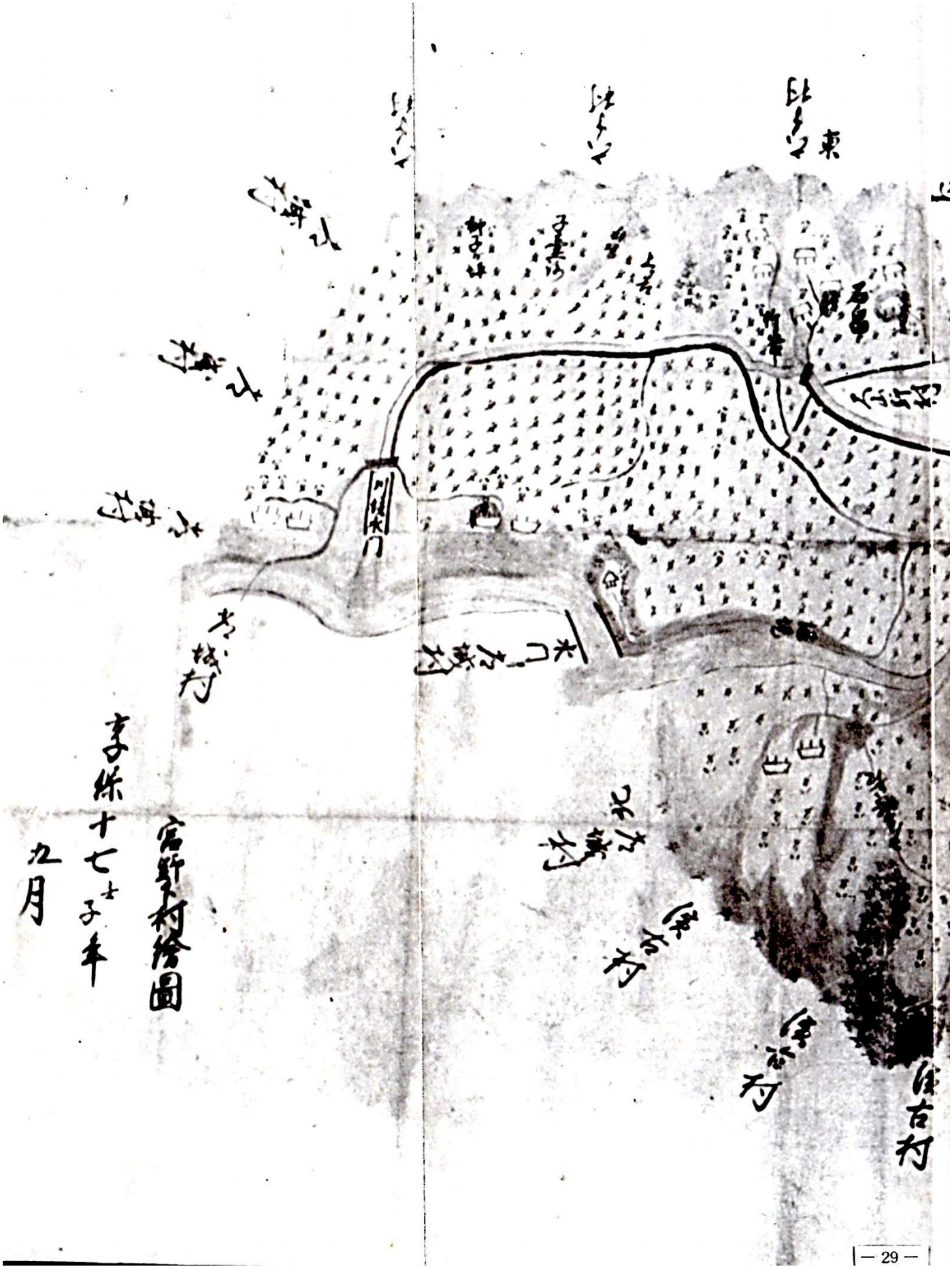
西谷

万所谷

と運動実行委員会、周南公民館 TEL0439(52)4915

宮野下村絵図　（享保７年／１７２２年）

すなみふるさと誌　巻八　宮下の巻　より



小山野村
小山野村
小山野村
小山野村

『すなみ　ふるさと誌　巻八　宮下の巻』からの紹介

（編集　宮下ふるさと誌編集委員会／発行日　昭和５９年３月３１日発行）

遍照寺

宮下のほぼ中央、字宮下６１５番地にあり、大波山と号す、智山派小久保真福寺末なり。本尊は大日如来を安置し、境内３１３坪、堂宇丘陵により、高燥にして、前面には清流の淙々たるあり、景致佳なり、開山年月詳ならず。と記されている。

永祿年間（１５６４年頃）、戦火のため、本堂等焼失、その時、関係文書等一切焼失したと古老は伝えている。

又、創立年暦未詳、天正四子年、中興開基弘意律師、とも記されている。

文化１３子年（１８０４年）４月の、備品汁器台帳に、運慶作、本尊十一面観音１体が記されていたが、昭和４８年に盗難にあって紛失した。

明治３年、住職が押し込みにあって殺害された。

明治４年、政府の神仏切り離し政策により、神社と別になった。

明治１１年４月１６日から、明治２３年４月７日まで、周南小学校校舎となる。

明治２２年３月２７日、周南村役場を開設した。明治２８年５月２９日、宮下４８６番地に移転まで、役場庁舎となる。

昭和１９年７月から、昭和２０年８月まで、学童疎開、東京本所深川の、中和小学校５年男子生徒３５名受入れ、約１年間宿泊共同生活し勉強していた。

昭和２１年７月、宗教法人令による、宗教法人遍照寺設立。

昭和２９年３月２０日、宗教法人法による、宗教法人遍照寺設立。

（Ｐ61　寺院／編集委員会　より）

遍照寺仏像

・本尊大如来・不動明王・両童子・弘法大師・興教大師・地蔵尊（いずれも木彫、作者年代不明）

地区の子弟の教育の場として明治１１年４月１６日宮下小学校として、宮下･大山野･皿引･常代･郡地区の子弟１９３人受入れて、明治２３年４月７日周南尋常高等小学校に至る。

周南村の子弟教育の場として、校舎の出来る迄遍照寺を使用する。明治４１年１０月３０日新校舎落成し多くの人々を世に送り出し教育の場としての務めも終了する。

太平洋戦争当時、昭和１９年７月より昭和２０年３月迄東京方面より学童疎開を受入れる。

観音庵　本尊十一面観世音・地蔵尊・閻魔大王・誕生釈迦尊・薬師如来（いずれも木彫、作者年代不明）

澤田不動尊　本尊不動明王・矜迦羅童子・制吒迦童子（いずれも木彫、作者不明）

霊験あらたかな不動様として宮下の人々の信仰あり、大正６年台風の為に堂宇倒壊し、御尊体を一時遍照寺に移す。部落内に種々の

出来事有り。人々の間から不動様の再建復興の話題が持ち上がり、大正１３年１２月２５日の部落総会にて再建の決定を見る。大正１４年に再建なる。

周南中学校の移転に依り現在地に新築される。

（Ｐ98～　宮下遍照寺／遍照寺総代　より）

春日神社

宮下区の総鎮守で地区を縦断する宮下川に接するほぼ中央、氏子区域を一望に見晴るかす台地上に鎮座し、この下に広がる集落を昔から「宮下」と称している。

遍照寺保管の宮下文書の中には「宮下」「宮野下」「宮ノ下」等と書かれているが、言うまでもなく、宮の下、神社の下にあるという意でこの地名が付けられたものであろう。

元来この高地に宮下草創の祖宗等が村の鎮めとして神社の原型（磐境）を設けていたようだが詳しい事は判らない。

春日神社の祭神は奈良の春日大社の祭神と同じく天児屋根命で遠き神代の昔、皇祖天照大神の重臣として祭祀と国政を司った神とされ、律令時代の実力者藤原氏の祖とされている。

奈良時代には上総国周准郡の庁舎が現在の君津市郡字赤磯付近にあって宮下とは目と鼻の間にあり、初代郡司は藤原房前公と伝えられている事から、この地方には春日神社が多く、宮下に於ける数々の古墳や春日神社を鎮守とした理由も理解される様な気がする。

神社としての形態を備えたのは近世の事で本社に遺る棟札によると、万治３（１６６０）年宮別当遍照寺は願主十左エ門外３６名の願により寺の境内に明神社（おそらく春日大明神）を設立し、本地大日如来を祀ったと記録されている。

その後、正徳３（１７１３）年８月３日、春日、熊野、山王の三神像を大佛師三直宝利に造らしめて同年９月、現境内の高処に本殿、拝殿を建設して正遷官を執行したるが記録されている。

（Ｐ22　宮下と神社／葭川　昭男より）

●春日神社例大祭（現在は１０月第１日曜日）にて奉納される宮下の祭囃子について

…昭和５５年（1980 年）１月、前年から、新旧住民で新しい町造りが推進されてきた。その一つが村祭りを部落全員で実施することであり、これ等が具体化された。これに先立ち同年１月、宮下区画整理組合から、住民の文化活動推進のため、太鼓一式の寄付があった。

自治会と氏子総代が中心となって、祭ばやし導入を協議し、葭川宮司の指導と御尽力により、金谷ばやし導入が決定した。師匠に諸岡逸作氏（大太鼓）・宮田留治氏（笛）・鈴木源吾氏（小太鼓）・富永彰氏（小太鼓）・緒岡武夫氏（笛）の５名が快諾。３６名の弟子達も、昼夜をわかたず、熱心なけいこの結果、２ヶ月余りで初心者と思えぬ上達ぶりであった。５５年度初めての祭礼を無事終了し、以来年々祭ばやしを奉納している。第一、みこ。第二、あがり（みこに次ぐはやし）。第三、ばかばやし（道中をはやしながら行う）。

同年６月２８日、宮下祭ばやし保存会を結成する。

（Ｐ57　神社　一．春日神社／編集委員会　より）

６月２９日に祭り囃子の稽古始めを行う運びとなりました。（中略）初めて手にするばちや笛にとまどいをおぼえたものです。それから毎晩集会所に集まり、夜遅くまで稽古にはげみましたが、なかなか思うように手が動かず泣きたい思いをしました。

とてもものにはならないと思い、投げ出したい気持にもなりましたが、師匠さんの熱心な指導に会員もやる気を起こし、一生懸命練習に励みました。

そして会員の血のにじむような努力のかいあって、９月に入ると一通りたたける様になり、明るい兆しが見えてまいりました。

そして総代会、自治会の役員方からこんなに上手にたたける様になったのだから山車を引いて町内を練り歩いたらという意見が出て、急きょ山車の制作にかかりました。（10 月 15 日完成）

１０月２５日、いよいよ文化祭での初舞台の日、観衆の前で緊張し夢中でたたきました。短期間でマスターしただけに、観衆の評価も良く会員一同気を良くしていました。　１０月２７日の幟立ても終り、１０月２８日は宵祭りの行事として前夜祭のカラオケ大会。（中略）さて１０月２９日いよいよ本番 秋の例大祭、揃いのハッピにたすきがけといういでたちで身もひきしまり、神前での諸行事と奉納太鼓も滞りなく済み、葭川宮司さんによって山車に「みたま」を入れられ、いよいよ出発です。

きれいに飾られた山車が子ども会の手によって引き出され、お囃子の音が神社の森にひびきわたった時、会員の誰もが目頭が熱くなり感無量の想いにひたりました。…

（P90　春日神社祭囃子保存会を想う／田村栄　より）

宮下川

…宮下には、宮下川に掛かる橋が五ヶ所あった。

●一本橋

上流の橋で字萬所谷入口、友エ門下にあって、大正か昭和の初めに作られたか、椎ノ木一枚板（長さ２間半、巾２尺、厚さ３寸）の一本橋で、山野屋商店より宮下側に下り小山野に通じていた。大正から昭和の初めには、牛や馬の背中に大きな鞍を付けて、小荷駄と呼ばれた、稲・米・麦・下肥等をのせて川渡りをした。

●おおみや橋

昭和５２年３月、国道、小山野より宮下字高塚、西谷から大山野へ通ずる道路が出来、昔の道は９尺程であったが、常代、鹿野山道へつながり、真すぐな道になり大変便利になった。

●宮下橋

※この文章の「現在」は昭和５９年当時であり、平成１６年には新しい宮下橋に変わっています。

駒田屋地先で宮下字舞台に有る橋で、昔は幸助の橋とも呼ばれて、左の坂道を行くと大山野へ、右へ行くと宮下西谷、高塚地先へと通じ、この頃の橋は現在の橋より３０ｍ上流にあって６尺ぐらいの丸太を並べて地表に土を敷いた橋であった。

昭和１０年頃に現在の橋に架け替えられ

た。またこの橋を境にして上組、下組と分かれ、この橋が宮下の中心であった。

現在では昭和３５年１月に完成したコンクリート造りのりっぱな橋に変わっている。

●関台橋

近所の人は“せだい橋”とも呼び、川巾約４間程の小さな橋であった。高さも堤防と同じで、大雨が降るとすぐに橋げたに水がつく橋であった。昭和１０年ごろに長雨があり、この間の台風による豪雨で、（中略）関台橋は流され、（中略）字関台の川付の田は川底に沈み、山は崩れ、道路は通れない場所が沢山でき、被害も大変多かった。（堤防の復旧に約２ヶ月がかかり、）昭和１２年頃には橋工事となった。

現在の橋は、昭和４９年３月にコンクリート造りで宮下で一番立派に生まれ変わった。

●高間橋

現在の橋より上流にあった昔の橋は役場から常代へ向かい杉木立の間を抜け河坂を下りると村の玄関ともいわれた高間橋があった。橋の高さは２間か３間ぐらいの木橋であったが村では一番立派な橋であった。

村で出征兵士が軍隊に入営するときは、部落の人々が役場の玄関前に集まり、村長さんのお祝いの言葉、出征者のあいさつと続き、それらが終わると「祝入営」の長旗を５本、６本と、出征者は寄せ書きをした日の丸を胸に堂々と河坂を下り村人の皆さんに送られ高間橋の上で万歳三唱をして見送りをした橋であります。

現在はコンクリートの橋で昭和３０年頃に完成した。

※この文章の「現在」は昭和５９年当時であり、平成１３年には新しい高間橋に変わっています。

（Ｐ169　宮下川にかかる五つの橋／内海俊夫　より）

『高間傳兵衛』について（周南公民館20周年記念誌「ひびき」よ

―― 幕府の米政策に
翻弄された米問屋 ――

高　間　傳兵衛

特権商人の中に、上方から江戸へ運ばれる米を独占的に購入する権利を与えられた御用商人がいた。幕府指定の「下り米問屋」といわれ、享保年間（1716～1735）にそのような「下り米問屋」は８名おり、高間傳兵衛（生没年不詳）がその中心的存在であった。「下り米問屋」が独占的な米の購入権を与えられていたのは、幕府の米価政策の一翼を担わせるためである。傳兵衛は、その幕府の政策の忠実な協力者として繁栄していた政商であった。

「米将軍」吉宗の財政政策の中で

八代将軍吉宗の治世である享保期は「米価安の諸色（ショシキ）高」といわれる状態が慢性化していた。諸色とは、米以外の商品を指しており、要するに米の相対的な価格が下がったということである。米価はすでに市場原い。傳兵衛が協力的なのは当たり前である。幕命に忠実であればあるほど、儲けることができたからだ。なにしろ江戸で消費される米は関東・東北地方の米だけでなく、上方から回される米も多かった。その米を独占的に購入し、できるだけ高値で売ることが幕命なのである。　幕府の機嫌を損ねさえしなければ、これほど安定したうまみのある商売はそうザラにはない。傳兵衛は内心では笑いが止まらなかったことだろう。

米価暴騰、民衆の打ちこわし

しかし権力に媚を売り、特権の上にあぐらをかいているだけで商売が繁盛し続けるはずがない。時代が変われば政策も変わり、いずれ没落への道をたどるかもしれない。また、幕府の権威を背負った商売であれば、気づかないうちに傲慢さを身につけ取引相手や庶民の反発をかうこともある。

享保17年、西日本一帯は蝗（イナゴ）の大量発生により大凶作となった。享保の大飢饉である。大阪の米相場は、平時なら一石銀五十匁ほどであったが、銀百五十匁まではねあがっあまりに幕府よりで、庶民の反感をかったものと推測できる。いずれにせよ、見るも無残に破壊されつくした自宅の前で、傳兵衛はただ茫然とするだけであったろう。

「米高間１升２合で粥にたき、大岡食わぬたった越前」という狂歌も詠まれた。「高間伝兵衛の米買い占めで銭を百文出しても１升２合しか買えない。そのために粥にしてみたが多く食うこともできない。たった一膳だけだった」という意味である。

以上「江戸豪商百話」より掲載させていただきました

理に従い、諸物価に左右される経済構造になってしまったのだ。

しかし、米を基準とした財政策を採る幕府としては、この「米価安の諸色高」はどうしても抑えなければならなかった。将軍吉宗は、米価操作に積極的に取り組んだ。諸大名に対して江戸・大阪への米出荷を制限したり、幕府が資金を出して米の買い付けを行うという方法を取った。享保16年（1731）、江戸で買い占めた米は十八万石、大阪では六十万石であった。とにかく見栄も外聞もない。米価を操作して米経済の安定に尽力したのである。この頃の吉宗を別名「米将軍」と呼んだほどであった。

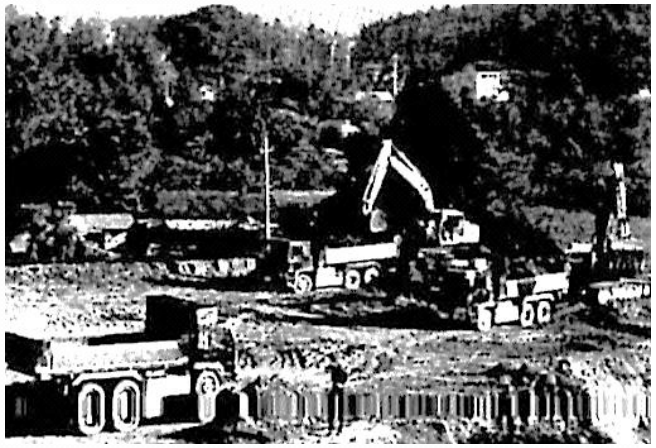
当時、将軍吉宗の右腕として活躍した大岡忠相（タダスケ）も、米政策に積極的に参画した。酒造りを奨励して米の需要を増やしたり、米の買い占めにひと約かったりと、なりふり構わぬ米価政策を乱発した。そして下り米問屋も米価引き上げ策に重要な役割を果たすものであった。

とくに高間傳兵衛は下り米問屋の中心人物として幕府の米価政策に協力的だったといわれ、大岡忠相も傳兵衛を重宝したらした。そのため通常は江戸の消費に当てられた分も大阪に運び込まれた。当然、江戸の米は払底し、米価は暴騰した。庶民は困窮し、町奉行大岡越前守忠相へ町ぐるみの訴願が行われた。しかし、忠相はこの事態に対し何ら打つ手を持たず庶民の怒りがついに爆発するにいたったのである。

翌、享保18年（1733年）正月、商売がたきの画策もあったのだろうか、「米価を吊り上げているのは高間伝兵衛だ！」といううわさが市中に広がった。そして正月26日、2千人におよぶ民衆が日本橋に近い傳兵衛の家に押し寄せ、「米を出せ」という怒号とともに家の中に乱入し、打ちこわしが始まった。幸い伝兵衛は帰郷（常代）しており難は逃れたが、家屋敷・家財・帳簿類の一切が破壊されつくした。

この打ちこわしは、庶民の、幕府の米価政策に対する批判行動であるといわれる。しかし、のちの天明の大飢饉の際、江戸市中の千軒近い米屋が打ちこわされたのに比べると、この時は傳兵衛の家だけであった。

数多くの米屋の中から伝兵衛の家だけが選ばれたということをみれば、その商法が



消えゆく高間傳兵衛屋